

法宝『一乘仏性究竟論』の「如来蔵唯識」説

寺 井 良 宣

一

幾年か前に石山寺でその大半が検出された法宝（六二七―七〇五頃）の『一乘仏性究竟論』（六卷、以下『究竟論』）は、唐代中国での仏性論争の内容を知る上に貴重な文献である。この書に反論を加えたものに、慧沼（六四八―七一四）の『能顕中辺慧日論』（四卷）が現存し、また法宝の書は日本の一乗・三乗論争における三論宗や天台宗の主張に重要な影響を及ぼしたことがよく知られている。その新出の資料にもとづく研究成果はすでにいくつか発表されて、法宝の主張と教学は徐々に明らかになりつつあるが、それでもなお思想や理論の面で説明されねばならない余地は多くある。

『究竟論』は法華経や涅槃経の「一乗・仏性」説を究竟（了義・真実）とする立場から、唯識法相宗の「三乗・五性」説を権教として退けることを主題としている。同書の構成にはいまふれないが、巻四の「破法爾五性章第八」はもっとも浩

瀚で、この書の中心部とみられ、ここでは法相宗所依の玄奘訳『成唯識論』の学説、なかでも「法爾五性」（五姓各別）説と、その根拠である「本有（法爾）無漏種子」説を厳しく批判している。そこで、この章での法宝の主張をみると、法宝は涅槃経・法華経によるのみでなく、如来蔵の経論も多く用いて如来蔵思想への志向を強く示していると同時に、唯識の経論も多用してこれを如来蔵思想によって解釈し、ことに楞伽経や密蔵経をもとに、如来蔵に阿頼耶識を結びつけた理論をその主張の根幹にもっていることを知る。よってこの小稿ではその点に注目して、法相宗の学説を批判する法宝の主張とその根拠が、涅槃経の仏性思想に加えて、如来蔵思想を基盤においてそれに唯識説を融会しようとする「如来蔵唯識」説にあることをとくに明らかにしておきたい。

二

『究竟論』の「破法爾五性章」は、法相宗（『成唯識論』の

「法爾五性」説を破斥するのに、六門を設けて詳述している。六門とは、(一)種性不同、(二)本性一切衆生平等、(三)五性差別由新熏、(四)破西方積真如所縁縁種子、(五)通唯識証法爾五性文、(六)初無漏因である。法相宗の「五姓各別」説は、本有無漏種子の有・無によって三乗の聖果の別や、五種姓の差別が法爾として(先天的に)定まっているとするものであるから、法寶はその無漏種子説を強く拒否し、三乗や五姓の別は新熏によって(後天的に)生ずるものであって、衆生は本来的には平等に成仏する可能性をもっていることを主張するのである。

法寶では、衆生がみな成仏できるのは「本性」という法爾の仏性(菩薩性)が衆生には平等に具有されているからであるという。それは、善戒經のつぎのような説にもとづく。

性有三種。一者本性二者客性。言_二本性者陰界六入次第相統無始無終法性自爾是名_二本性。言_二客性者謂所修集一切善法得_二菩薩性_一是名_二客性_一。

これによると、陰界六入(衆生の身体や諸法)には法爾(法性自爾)の本性があることが説かれているから、法寶では本性の点では衆生には何らの差はなく、三乗や五姓の別は客性という後天的なもの、つまり善法の修集いかによって生ずるとみるのである。この「本性・客性」説は、法寶ではつぎのような涅槃繫經の「正因・縁因」説に同意であるとされる。

法寶『一乘仏性究竟論』の「如来藏唯識」説(寺井)

すなわち、涅槃繫經のなかに、

衆生仏性亦二種因。一者正因二者縁因。正因者謂諸衆生、縁因者謂六波羅蜜。

正因者名為_二仏性_一。縁因者發菩提心。以_二三因縁得_二阿耨多羅三藐三菩提_一。

などと説かれるものを指す。ここでは、成仏のための正因は衆生であり、また仏性であるとも説かれており、法寶ではこれを先の本性に同じとみる。つまり、仏性・如来藏の意味に善戒經の本性をとらえるのである。また、縁因は後天性の発心や修行(六波羅蜜)を指すから、先の客性に当たると法寶は理解する。

つぎに、善戒經の「本性・客性」説について、これと同趣旨のものが『瑜伽論』卷三五の「本性住種性・習所成種性」という二種性(姓)説であることを法寶が指摘するのはとくに注目される。というのは、『成唯識論』では『瑜伽論』のその二種性説は、無漏の本有種子と新熏種子とに解釈されるからである。法寶では、本性(本性住種性)を本有(法爾)の無漏種子に解釈することを強く否定する。両者の解釈の決定的な相違は、本性が無常法か常法かという点にある。

『成唯識論』では種子に六義が規定され、種子は無常法であるから平等皆有のものではない。そして、成仏の因である無漏種子は本有(法爾)であるから、五姓の別は法爾に存す

ることになる。しかし、法宝では法爾であるものは決して無常法ではなく常法でなければならぬというのがその確信である。本性が常法であれば、それは平等皆有である。したがって、成仏の因である本性はすべての衆生に具有されており、本性のゆえには三乗や五姓の別は何ら存せず、それらの差別は縁因^二客性^二習所成種という新熏(後天的なもの)によつておこるとというのが法宝の主張の核心なのである。

もとより、種子が六義の規定によつて無常法であるとは法相宗の立論であつて、法宝では本性が種子と表現されても一向にかまわない。そのことを法宝は『瑜伽論』の「真如所縁々種子」説に見出している。真如所縁々種子は、真如を種子と表現されたものと法宝ではとらえ、これを無常法の無漏種子に解釈することを破斥して、涅槃經の「第一義空(仏性)を種子と名づく」との説や、『起信論』の「三大」説と同列に、いずれも本性に等しく、出世法の因がどの経論でも常法で皆有であると説かれていることを法宝は主張する。

三

さてつぎに、法宝の主張する平等皆有の本性や正因がいかなる内容をもっているかについて、法宝では密厳經に「阿頼耶識恒与一切染淨之法而為所依」と説かれ、あるいは楞伽經に「如来之藏善不善因能遍與造一切趣生」と説かれる

などを根拠に、如来藏と阿頼耶識がいずれも本性(正因)であると主張する点が注目される。そして、如来藏と阿頼耶識は、涅槃經に仏性を理と心とに説かれることに相当し、理は如来藏で、心は阿頼耶識を指し、これら理と心が本性であるという。また、法宝は大乗阿毘達磨經偈を『宝性論』によつて引用し、一切法の依止とされる「無始時來の性(身)」を、『宝性論』では勝鬘經によつて如来藏と解釈され、『撰大乘論』にはそれを阿頼耶識と解釈される不同を指摘しながらも、これらを理と心との関係でともに本性ととらえれば相違はないと理解している。したがつて、如来藏と阿頼耶識は一切衆生に平等皆有であり、そのこと自体には何ら衆生に区別はないとされる。

そのような本性(正因)から、衆生の迷・悟の差別が生ずる過程を法宝はつぎのように述べている。すなわち、

正因者謂如来藏性及第八識。如末尼珠因日光触二即能生火、若因月光即生於水。水火雖二性相違同一珠生。随光明昧多少不同。若迷心緣三種熏習生死輪廻、随迷輕重六趣不同。由聞熏習漸生悟心緣起觀還滅涅槃、随悟勝劣三乘有別。

と。このなかに末尼珠とは密厳經所説のもので、正因である如来藏と阿頼耶識をたとえている。末尼珠が日光または月光という縁因(客性)に遭うことによつて火または水に変わるように、衆生は三種熏習(縁因)によつて心(阿頼耶識)が迷

いをくり返し、その迷いの軽重によつて六趣の不同が生ずるといふ。また、聞熏習という無漏の縁に遭うと心は悟りの方向に転じて還滅涅槃に向かい、悟の勝劣によつて三乗の別が生ずるとしてゐる。

では、如来蔵と阿頼耶識はどういう関係にあるかといふと、法宝は密厳経をもとにづぎのように主張する。すなわち、

密厳経下巻云「如来清淨藏亦名無垢智常住無終始離二四句言

説。仏説如来蔵以為阿頼耶。惡慧不能知蔵即頼耶識。如来清淨藏世間阿頼耶如金与指環展転無差別。」准此经文又説二理心二本性也。如来清淨藏是理也。世間阿頼耶是心也。如金是理也。指環是心也。金為環体一喻真諦也。環為金相喻俗諦也。蔵即頼耶識者蔵為真也。識為俗也。諦雖是二解常広一。真俗二諦不一不異。如来蔵如金也。第八識如金相也。体相常不相離。金性是常、相無常也。如金或為一穢器或造一尊容。金性是常、相有淨穢。本識与如来蔵一亦爾。

と。ここでは本性である如来蔵と阿頼耶識は不一不異の関係で相即しているとみられ、それらは金と指環との関係でたとえられている。この所述を図示するとつぎのようになる。

本性
┌ 理——如来蔵——金——性——真諦——常——┐ 不一不異
└ 心——阿頼耶識——指環——相——俗諦——無常——┘

法宝は経説にしたがつて、世間の無常の相を阿頼耶識(心)のなかにみるが、しかしそれは如来蔵(理)を依り所とし、

法宝『一乘仏性究竟論』の「如来蔵唯識」説(寺井)

如来蔵(性)が淨・穢の相を造り出していると解釈しているわけである。

法宝では、本性は常住普遍の法であるから、そのみでは現実の差別法は生まれず、必ず客性(縁因)を条件とする。

そして、聖道の条件としては『撰大乘論』所説の「聞熏習」を重視する。聞熏習によつて衆生が有漏から無漏に転ずるさまを法宝はつぎのように述べる。すなわち、

多聞熏習同涅槃縁縁因善戒経客性。涅槃縁以乳酪為喻。乳為酪正因。煖等為酪縁因。…仏教即是後得智相以無漏教一生聞熏習。此聞熏習与有漏相違漸令前々有漏漸滅於後々念無漏漸生。非有漏中有無漏性。…如阿頼耶識得与有漏作親因縁。聞熏習種亦与無漏為親因縁。無別法爾有為無漏。

という。これは見道の初無漏因を、法相宗では法爾無漏種子とするのを法宝は否定して、聞熏習であると主張するのである。法相宗ではその場合、無漏種が親因縁で、聞熏習は増上縁とするが、法宝では聞熏習(客性)を親因縁とする。また、阿頼耶識を有漏の親因縁とも述べるが、法宝では法相宗のよいうなアビダルマ的な厳密な概念規定には無頓着であるかにみえ、この点は慧沼が厳しく批判している。そして、右の文では涅槃縁による乳が酪に転ずるとえが用いられ、乳(有漏)は衆生のごとで本性(正因)を指すから、つまり本性が有漏から無漏に変わるわけである。要するに法宝の考える本性と

は、因位の有漏が滅するにつれて清浄な法身が現われ出るところの如来蔵のことであり、如来蔵が因位にあって有漏に現象するものを阿頼耶識とみているわけで、阿頼耶識の実体は如来蔵にほかならない。

四

ところで、『究竟論』では多くの教証を示すことが重要な特徴であるといえる。「破法爾五性章」の六門のなかでも法宝は教証を並べるところをその論法にしている。しかも、論書よりも經典に重きをおく傾向が強く、右にみた法宝の本性(正因)平等説や、如来蔵唯識説でも、善戒経・涅槃経・密厳経などを主な根拠とし、経説をそのまま自己の理論に用いるので、法宝には理論の組織性に欠けることを免れない。その点を同時代の後輩である華嚴の法蔵(六四三―七二二)に比べると、法蔵は『大乘法界無差別論疏』のなかで、右にみた法宝と同じ密厳経の文を用いて、これを『起信論』から導き出したと思われる真如の「不変・随縁」義によって解釈していることが注目される。いまそれについて詳述するいとまはないが、法宝ではその主張の核心を如来蔵思想にもち、また諸法の因としての真如の活動性を主張してはいるものの、法蔵のような随縁思想にもとづく真如(如来蔵)縁起的な思想とはかなりの差異がある。ともかくも法宝の意図では、玄奘新

訳の唯識の学説を拒否して、如来蔵唯識説をもってそれを超越しようとしたといえる。

1 浅田正博「石山寺所蔵『一乘仏性究竟論』巻第一・巻第二の検出について」(龍谷大学論集四二九号、一九八六年)、同「法宝『一乘仏性究竟論』巻第四・巻第五の両巻について」(龍谷大学仏教文化研究所紀要二五、一九八六年)。これら両論文に新資料の翻刻が載せられている。なお、以下における『究竟論』の典拠は、右の両論文の前者をA、後者をBとして、それらの頁数を表記する。

- 2 大正30・九六二c。B一二四頁。
- 3 大正12・五三〇c、五三三b。B一二五頁。
- 4 B一二四頁。大正30・四七八c。
- 5 大正31・四八b。
- 6 B一二五頁、一二九頁。
- 7 B二二一―二二二頁。
- 8 B二二六頁。大正31・八三九a、一三三b。
- 9 B二二二頁。
- 10 B二二二頁。
- 11 B二二二頁。
- 12 大正45・四三〇a、b。
- 13 大正44・六九b。

〈キーワード〉 法宝、如来蔵唯識、五姓各別、無漏種子

(龍谷大学講師)